



会員メッセージ

「縄文と私」

本年は、エゾ地がホッカイドウに命名されてから150年。150年の歴史は、松浦武四郎、アイヌ文化、そしてその底流にある、縄文文化を抜きには語ることはいえないでしょう。今、世界は、環境、経済、平和、すべての分野で深刻かつ複雑な問題が発生しています。

このような時代状況の中で、最近、私は、自然と共生の心が息づく縄文の精神を学び発信する意義を痛感する二つの事に出会いました。

4月21日、朝日新聞の記事に『沖縄石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡（しらほさおねたばらどうけつせいせき）で見つかった旧石器時代の人骨がデジタル技術で国内最古の顔として復元された。これによって日本人の祖先が、どこから、どんな姿で来たのか、解明する手がかりとなる。頭部の復元、肉付けの作業の結果、彫りの深い顔は、中国南部や東南アジアの古人骨、縄文人と似ている。』と掲載されていて、大変興味深い記事でした。

もう一つ、私ごとですが、夫婦で古希を迎えた記念に5月、ベトナム旅行に行き参りました。世界遺産「陸のハロン湾」と言われている「チャンアン」で、横縄の模様が入った沢山の土器に出会いました。

エッ!! 縄の文様!?

懐かしさ!うれしさ!愛おしさ!

異国の地であり得ない身内に会ったような心の安らぎ、安堵感で一杯になりました。

この二つの事を通して、人類も国土も、正に人類皆兄弟であることを実感いたしました。

何千年も前に、自然に畏敬の念をいだき、人と争い傷つけることもなく生命を繋ぎ、土器や土器文様に、精神を吹き込んでいる縄文人、この気高き精神性を、世界遺産にすべきであることを、改めて実感した旅となりました。

北の縄文道民会議 会員 八木孝子



ちよこっ

縄文イベント情報

* 詳細は、チラシやホームページ等でお知らせします。
* 皆様からの情報もお待ちしております!

とまち縄文のつどい ~文化遺産とまちづくり~

入場無料



- 日 時: 9月29日(土) 13:30~16:30
- 場 所: とまちプラザ レインボーホール(帯広市西4条南13丁目)
- 内 容: 縄文遺跡の活用や、世界遺産登録が地域に与える影響について。基調講演、パネルディスカッションなど。
- 主 催: とまち縄文の会、北の縄文道民会議、公益財団法人北海道文化財団(特別後援: 北海道ほか)

■問合せ: 北海道環境生活部 文化局文化振興課 縄文世界遺産推進室 011-204-5168

- 編集 ◎ 夏号の発行にあたり、ご寄稿いただいた皆様にお礼申し上げます。今年7月、『北海道・北東北の縄文遺跡群』が世界文化遺産の推薦候補に選定され、一歩大きく前進しました。
あとう一歩で「北の縄文遺跡で奇跡だ!!」(T.H)
- 後記 ◎ 念願だった推薦候補への選定! ゴールはもう少し先ですが、このチャンスに縄文ファン拡大を狙います♪(I.K)
◎ ご紹介したい内容は盛り沢山なのですが、誌面の都合によりご紹介できず...。次号もがんばります!(M.S)

編集・発行: 北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議 編集長 谷 紘道 編集委員 井上香織、村上志保子
TEL: 011-221-1122 FAX: 011-221-0117 <http://www.jomon-do.org/> E-mail ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp

HOKKAIDO JOMON CLUB NEWSLETTER

北の縄文 夏

2018

VOL.8

平成30年8月発行

目次

- 1歩大きく前進しました!! P1
- 北の縄文コラム P2
- 縄文夏まつり 北の縄文セミナー@チカホ P3~5
- 会員メッセージ/縄文イベント情報 P6

1歩大きく前進しました!!

日頃から当会議の運営及び活動に対してご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

「北の縄文道民会議」では、2012年4月の設立から6年の間、北海道庁の縄文世界遺産推進室と協力し、縄文パネル展、縄文夏まつり、縄文雪まつり、セミナー開催、縄文ツアーによる遺跡の現地視察など、様々な活動を続けてきました。

こうした中、去る7月19日、「文化審議会世界文化遺産部会」において「『北海道・北東北の縄文遺跡群』が本年度の世界文化遺産の推薦候補として選定された」という、大変喜ばしいニュースが全国を駆け巡りました。

今回の結果は、自然との共生のもと、約1万5千年前から定住が開始され、発展・成熟した人類史上まれな先史文化を現代に伝える縄文遺跡群の高い価値が評価されたものです。ここまで大きく前進できたことは、会員の皆様のお力添えによるものと、心から感謝を申し上げます。

ユネスコへの推薦は、文化遺産、自然遺産あわせて各国1件とされているため、国の代表としてユネスコに推薦されるまでには、自然遺産候補の「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」との競合が想定されます。今後も引き続き、縄文文化の世界遺産登録をめざした活動を展開してまいりますので、皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

北の縄文道民会議 代表 堀 達也

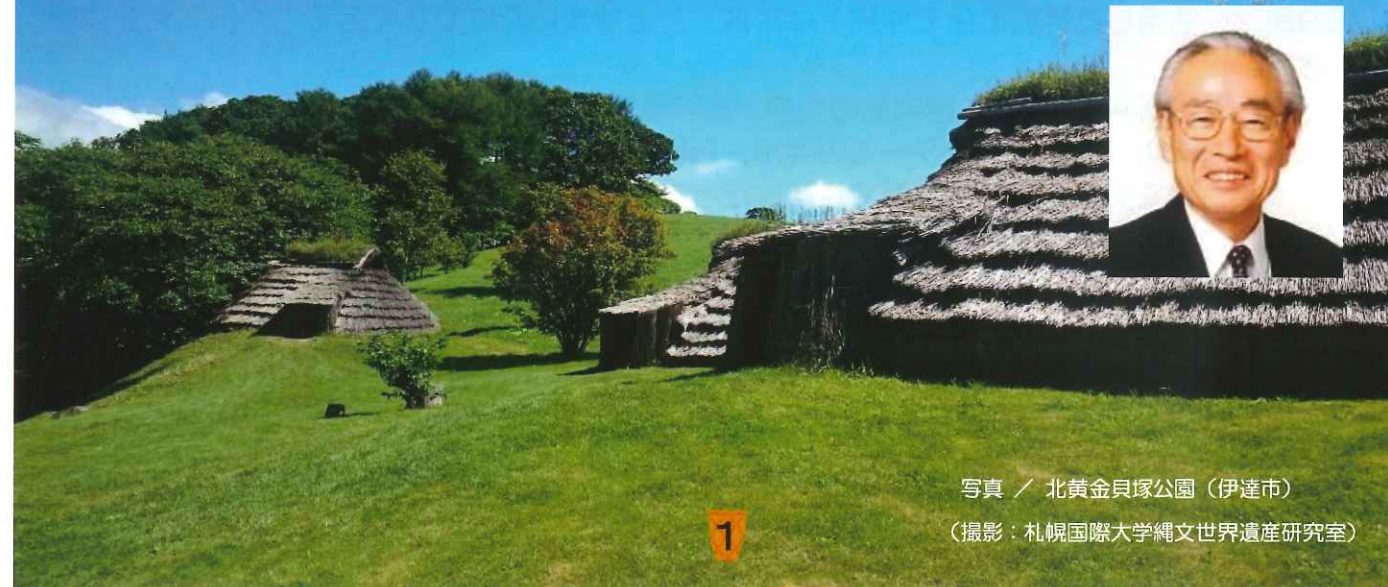


写真 / 北黄金貝塚公園(伊達市)

(撮影: 札幌国際大学縄文世界遺産研究室)



北の縄文コラム

「沖縄の縄文旅（2018.03）から」

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター常務理事 長沼 孝

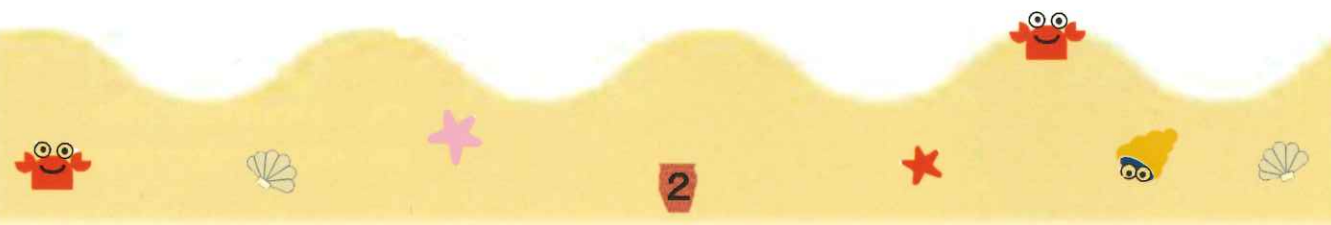
私は考古学を学ぶ上で現地・現物主義を大事にしている。実際に遺跡に立ち、また、遺物の実物を、できれば地元の博物館で実見。五感で遺跡と遺物を感じることが大切。そんな気持ちで、ここ数年縄文ツアーのガイドをボランティアで行っている。

最近3年ほどで、道内、北東北はもとより、山形、宮城、新潟、長野、鹿児島、沖縄の縄文文化に関する史跡や博物館を多くの人たちとめぐり、今年3月には18人、2泊3日の沖縄の縄文旅が実現した。1日目は新千歳・羽田・那覇空港経由で北谷町（ちゃたんちょう）へ、2日目は読谷村（やちむんの里）、うるま市（伊波貝塚、仲原遺跡、勝連城）、西原町（県立埋文センター）へ、3日目は那覇市内（首里城、県立博物館・美術館）、南城市（ガンガラーの谷）をめぐり、那覇・羽田・新千歳空港経由で帰路へ。

なんと言っても今回の収穫は、北谷町平安山原（ちゃたんちょうはんざんばる）B遺跡の縄文晩期の赤彩された「亀ヶ岡式」土器片を実際に手に取って実見できたこと。間違いなく本州で作られた土器だ。北谷町ではもう一つ、通常は非公開で墓域、拝所、大戦の避難場所として機能し、現在も地域の人たちで管理されているガマ（クマヤー洞窟）に入り、沖縄の風土と歴史を体感できたこと。うるま市伊計島の仲原遺跡は沖縄で初めて竪穴住居跡が発見され、復元整備された国指定史跡。しかし、地元の運転手も初めて訪れたとか。グスク以外の遺跡は人気がない。県立埋文センターでは沖縄考古学の最新の成果が展示され、学生時代に北海道での実習発掘経験のある専門職員の解説も印象的。県立博物館・美術館での人類学専門学芸員による解説付きの展示見学と、継続調査中でわが国最古の貝製釣針が出土したサキタリ洞窟を含むガンガラーの谷の見学ツアーも有意義で貴重な体験。最後の遅い昼食も伝統的民家を活用した評判の店で沖縄そば定食。たたずまいだけでなく舌でも沖縄文化を体感できた。

20年ぶりの沖縄の遺跡・博物館めぐり。北谷町の「亀ヶ岡式」土器、整備された史跡、さらに新しい博物館や埋文センターでの展示、石灰岩洞窟のツアーなど、近年の沖縄考古学の調査成果と縄文文化の沖縄を実感できた旅だった。旧石器人骨の発見などの話題も多く、しばらくは沖縄考古学から目が離せない。

狭いながらも延長 3,300 kmに及び日本列島、北の縄文をより理解するためにも、異なる地域の縄文を知ること大事。是非、広い視野を育む多様な縄文旅をおすすめしたい。



縄文夏まつり「北の縄文セミナー@チカホ」

平成 30 年 7 月 5 日～8 日、札幌駅前通地下歩行空間イベントスペースにおいて開催した「縄文夏まつり」は 3 名の講師にご講演いただきました。その一部を抜粋してご紹介いたします。

縄文人は何をとって食べていたか？

- 洞爺湖町高砂貝塚の「骨」をみてみよう -

洞爺湖町教育委員会社会教育課主任(学芸員)

三谷智広 氏

縄文人は何をとって食べていたか、今日は、入江・高砂貝塚から出土する動物の骨の分析結果から、季節的な狩りのサイクルを考えてみようと思います。

入江・高砂の両貝塚は、噴火湾に面する洞爺湖町（旧虻田町）の小高い台地の上にあり、それぞれ三つの地点貝塚が発見されています。

入江貝塚は別名「黒い貝塚」と呼ばれ、貝が少なく動物や魚の骨の割合が多いのが特徴です。縄文前期末（約5,500年前）から後期の初頭（約3,500年前）の貝塚を伴う集落跡で、ここから、手足の骨が非常に細い、約17～8歳の成人女性の人骨が出土しました。小児麻痺を患い、周囲の介護を受けながら10数年間寝たきりの生活をしていたと思われる、当時の福祉文化を示す貴重な人骨です。また、建て替えた痕跡のある竪穴住居も発見されており、同じ場所に何度も家を建てて暮らしていたと考えられます。

出土品の中には、形が非常に綺麗で文様が彫り込まれた銚頭（もりがしら）などの骨で作られた道具もあり、これはイルカやオットセイなどの海棲哺乳類（かいせいほにゅうるい）の獺に使っていたと考えられます。また北海道に生息していないイノシシの牙で作られた入れ歯の形のような製品や、南海産の貝で作られたアクセサリーも出土していることから、当時の人々は海を越え、その行動範囲は広がったということがわかります。

高砂貝塚は、後期初頭（約3,500年前）、縄文晩期中葉（約2,300年前）の貝塚により構成されており、入江貝塚とやや時期が重なります。高砂貝塚からは、縄文晩期の人骨が28人分出土し、中には出産のトラブルで亡くなったと思われる妊産婦を手厚く葬ったお墓もありました。お墓の周辺では配石遺構が発見され、さらに土偶も出土していることから、墓前祭祀を行っていた可能性があります。

また北海道では発見例の少ない縄文晩期の貝塚も高砂貝塚の特徴の一つです。



▲ 高砂貝塚 A 地点貝層断面

ここからさらに、動物の骨を分析することで、食生活をはじめ狩猟や漁労のサイクルまでも推定することができます。

高砂貝塚の場合、3つの地点貝塚で特徴が異なります。例えばA地点貝塚ではオットセイの出土が目立つ、C地点貝塚では哺乳類が少なく貝と魚骨が多い、D地点貝塚ではタマキビなどの小さな巻貝が多いといった具合です。

C地点貝塚の動物骨の出土量をより詳しく見てみると、貝類と魚類が多く出土し、次いで棘皮類（きよくひるい（ウニ））やフジツボが多く、哺乳類はほんの少ししか出土していません。貝類ではアサリが80%以上を占め、魚類では、カレイ科、ニシン科、フサカサゴ科が上位を占めます。これらは縄文人が採取・捕獲したものなので、これらの動物を主に食べていたことがわかります。



▲ 高砂貝塚 C 地点貝層断面

さらに、動物の生態を参考に狩りの季節を知ることができます。例えばニシンは春先に産卵のため接岸する、カレイは主に夏に産卵のため接岸する、などといった生態や回遊の状況を参考にすることで、縄文人がいつ獲物をとっていたかを推定することができるわけです。このことからC地点貝塚にみる漁労活動は、主に春・夏に集中しているといえることができます。ただしA地点貝塚では、冬を中心に噴火湾に回遊してくるオットセイの骨もたくさん出土しているので、狩猟活動は冬にも行われていたことがわかります。このように他の動物も考え合わせると、一年中同じ場所に住み続け、狩猟・漁労活動を展開していた、つまり定住していた、ということがわかるわけです。縄文時代には、その地域に適した計画的で季節的な生業のサイクルがあったと考えられます。縄文人の生活の様子を知る上で、貝塚の動物の骨はとても良い資料といえるでしょう。